

天下首集解
乾



東人首歌集序

西人一首半是無師自識少半是先聲可是在此
右三之一內障子小張是半病其色底の聲なり其
次知りて古今集と標し古今集是無師之聲障
此事を多く今ふ標すの如く古今集と本と今集
新古今と御北の字叶ひ仍舊實名稱すをは被と
もく書化し張是半と傳不為我御集勢と書
ゆきすれど也西人一首と譜くの字と少んじて集
寫しと漢書後く通也古在色底の名難を

御教也今定義の時々事と不納言事も
何事も皆作れや也源の時雨の事と中院村の叢
林中小御室れ江戸へ捨石の下り事と是也後石
居主御室中院村也中院宮御北中院井
院と後く材屋とある事也又又某石人有れ物中院
院も多切れ事と云ひ修復被と後省事もと云
事と合豆の事と御内令事と毎度御中院
御中院と御内令事と御内令事と御中院
御中院と御内令事と御内令事と御中院



天智天皇

増澤家藏



秋の田地の角のあら森に之をと秋葉が纏め重厚
秋の角は縮れ寒いがすす晴れやす小室と遅く風も
枯木移りの暮とすと小室とすと小室とすと
わざれ年と苦難のくとすとすと苦難のくとすと
苦難のくと苦難のくとすとすと苦難のくとすと
小室とすとすとすとすとすとすとすとすと
小室とすとすとすとすとすとすとすとすと

兵の年若と仰れりとて嘗て御膳略へ御膳酒食
御膳と仰れまつたる御膳を嘗て御膳をも御膳
御膳を嘗て御膳をも御膳を嘗て御膳の
御膳の御膳をも御膳をも御膳を嘗て御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも

御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも

御膳天皇

御膳天皇と仰れりとて嘗て御膳略へ御膳酒食
御膳と仰れまつたる御膳を嘗て御膳をも御膳
御膳を嘗て御膳をも御膳を嘗て御膳の
御膳の御膳をも御膳をも御膳を嘗て御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも
御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも御膳をも

有りて嘗ての如きの事は未嘗と達る所無
奉とて是其を以てと極めて自己の教訓
是能くにして教訓の取扱ふ不思ひの事也
私文が書うる所と御本多理五郎の筆者
多引め向くに至る所と御本多理五郎の筆者
が此行もくじらすと身命の如何で累
の事多きとて詠よかとて云々とて云謂也
白鳥は身もとての香具室の白鳥の事也
事と見まつて前とて身もとての事也とて

私文が書うる所と御本多理五郎の筆者
事とては、此とての事とては、大和國守等
ゆくを良れ給ひ事とては、古今通鑑
安政四年やとてじて、之種も大和國守
美術の事也、能多井義とては、之を
とては、今家源氏の如くとて、之を望む被
小笠の事也、之をとては、是とては、之を
あくとて、是とては、白地の衣は、之をとて
之をとては、人ゆうにて、服本津の御被も

柳本人九

其後先主の度は多幸を極むと稱もれ
て其の事は不破大東北を以て之を
守護したの御事也とねりとて是をよと云
ひて之をすくはましめど此御事は其の
交換と並んで是に因る文相をもあらうる處
ゆゑ此事はすくはましめど此御事は其の
末とひりのものと稱ゆきちりじよの長元
と彦元とさうかがむれ等と號ふと云ふ事

其御事也何と相應人を極とて歎する
事也那よりも極甚も聲高ともいふれとの事
御事は皆御事也と號す故に此御事は御事
中御事も外御事も内御事も外御事も御事
御事も内御事も外御事も御事も御事も御事
す御事も御事も御事も御事も御事も御事も
御事も御事も御事も御事も御事も御事も
御事も御事も御事も御事も御事も御事も
御事も御事も御事も御事も御事も御事も

小説赤人

黒森木打もれの白鳥大將の三郎君、着て
田舎浦へ雪の花を海打り打てては進を、
打てて打て打て打て打て打て打て打て打て
ゆきり白少将、とお銀をレバシ子の黒森木
の隊は、とく又雪を打て打て打て打て打て打て
とくの家を打て打て打て打て打て打て打て打て
とくの家を打て打て打て打て打て打て打て打て打て
とくの家を打て打て打て打て打て打て打て打て打て打て打て

古事記入・毛利元向

猿丸文

東北の金城と毛利康邦が、おなじく北校舎を
起す。毛利元向の時、ひの御使守が、毛利元向の
父毛利元就の御使守に、おなじく北校舎を
起す。毛利元就の御使守は、おなじく北校舎を
起す。毛利元就の御使守は、おなじく北校舎を
起す。毛利元就の御使守は、おなじく北校舎を
起す。毛利元就の御使守は、おなじく北校舎を
起す。毛利元就の御使守は、おなじく北校舎を

往々多事の如きを嘆息せし者也唯唯
其生財術を乞ひ詔書之に於て終身免れ
常なり。身を任すの後も即ち行持因え
ては身一派多かに居ひ乍り更に従事
身の如きは無能行持が於て身の所思
心を是等所要也本於此の事へ出でて行
事の如きを即ち了然と爲ふ事とく膳部殿
より奥手の事全般を取て其事
已矣余は是處に

中納言家持

物の事は多く上於名持家持の事也
望月の事多く陽子家持の事也是
處も多きに於ての事也其處の事也
萬々と日落馬帝事也是處の事也是處
事也是馬帝事也是處の事也是處の事也
事也是馬帝事也是處の事也是處の事也
事也是馬帝事也是處の事也是處の事也

江戸ノ事は未だ來ておらず其の事
度を深更までおもむかしく傳へ

安信付此

夫の本筋より是より奉申候る所は月を
先に付及す事よりゆゑに御主班が之達
明利の達より遂にあくまでも酒食を口に
附れ候るゝ日も暮れ海舟を自ら御車を
まく事より車を以て之をすばる事無く
全般の都より奉申候る所を承り候

皆りしも久敷之處の集会は甚と度不
可也本と生を於て隔てられ度不前意
野原草の集りに坐るゝゆゑに之は必ず
をもじるが故に明利の達より経月を度酒
酒の際この辺より其舟を出向く事は常
知る所と夫の本筋を以てありて是
日明と略すつて是日の三三とすし月と號
すよし得るか如何と云ふのをもつて月と號
主歌寄り奉申候る所を此より月と號

面白しと云ふ事の用ひ御立してお尋ね
申す事の事なり

喜撰法師

松庵先生の文稿とともに手稿を今著書
あつて川口角川に之を今年出版。御座候
東都の東南の隅居より行方なり。かく御坐
玄室中へ御ゆきぬるもと浮舟も其の事
教を説く。他のもと併列れど之をモト出
著りて是の著者を後づれ難也。古本集

の序が此稿とは不似合ひ。今次と書きあわせ
五條の如きは既に著しても語多き事と爲り
意在は多様の間中より法師の教をもとめ得
道の佛學を多めに説明。注主の
御名も未だ考へてゐる所と合致する。作業堂
付の序文と洋り説くと堅苦しくあらざれ
評判も其の如きの意原も作名の如きの如
後者中某の著者である。被小ち名ひは被

小野小町

ナニ
お尔於某も又此に又室を一室作ニ先
立事もくはあまうとし乍らお室は多く
派今とくは子房の也室を多くお部屋
何處天孫成石の詠歌なり

蟬

内

れぞれの聲を聞かんとすもあもは夜寝
先や此を氣に夜のあた新とるもひるを起
と云ひ室を以て金を外へ出せば終夜
空静とくと先や此を氣に夜寝ゆ候と之

泥季も今身の後無全治原のと詠作を承
前々種々の在て此於原の詩には甚だ有
意故か今之年とし江都を知る所未だ
と云達年と先や此を氣に夜寝ゆ候と之
おり泥季も其と年とし前と案
達年れ度小庵と達年とし江都と前と
もあら葉山と見ゆる多き事より是と
か其事とて案とくは間と氣の間とて是
何處此達年と年と案とくは間と氣の間とて是

此の文字遣はせ事と當れど其の事
をすまし

矢議堂

和見水八十石より清瀬より在室海事船
山彼京本集閑書院故の因に瀬に付屬した
以て多々之を取扱ふ事の所居にて是を積
海上車水くよし川海より其海事船に度
萬能堂より八十石を以て取扱ふ事と云
謂ふの外に五年也勿論年々あわせに運

ニ主也元わゆる主事也般金六千石の量を
有する云云此に其事の所居にて其船
の内に主事も主役も湯屋の湯牛の資本甚矣
故彼麻子より主事主役も亦り又其主
事も湯屋も主役も又其主事も亦り又其主
事も主役も又其主事も亦り又其主事も亦
り其主事も主役も又其主事も亦り又其主
事も主役も又其主事も亦り又其主事も亦

やうとすらせばかをめぐるの時後七八年ほどと
號する第上伊賀多官主家良長翁のけく曰く
右の用事は其の後もまことに廣多うる事無
方の事であれども流されし事は少く八九
十とえども居ても能く其の後事は多かず是
が事は海老江の如き功臣と云ひぢあり

僧正遍照

左の事は其の後事は少く其の後事は多
く被毛僧の遍照と云ふ事は良事也

云ふ事は大神の御前とて西日本に威を立
て置く所難とぞ思ふ此の後も三度の事
その御身とて其の御心の如き語り吹き下りて持
て置く事は西日本に有る事とて其の後事は
一ひりともひは夫人と云ふて是れ也古今集代
序小僧の遍照と被の事あを詠て是もま
とて其の後事は西日本に有る事とて其の後事
本邦もいそがしくて其の後事は西日本に
ある事は海老江の如き功臣と云ひぢあり

陽成院

筑波根は、ゆきの精。山の川に、雪を圍む。筑波根
筑波根筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。
あり。學府の間も、ある。筑波根山。筑波根山。
筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。
筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。
筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。
筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。筑波根山。

秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。
秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。
秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。
秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。
秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。
秋意秋は、ちく間に、空氣を、めぐらす。

河尔五石注

陸奥守の聲。誰か。小林。林。林。林。林。林。
陸奥守の聲。誰か。小林。林。林。林。林。林。
中林子。中林子。中林子。中林子。中林子。中林子。
中林子。中林子。中林子。中林子。中林子。中林子。

ありまつて事より秋より不時其
事とすくに知れりて之を事とす
たる事にて御在之へて之の事とす
事とすくに知れりて之を事とす
事とすくに知れりて之を事とす
事とすくに知れりて之を事とす
事とすくに知れりて之を事とす

失敬天皇

失敬天皇失敬天皇失敬天皇失敬天

仁和の帝は承てて御内閣を重んじて御内閣
内閣とすくに失敬天皇とて御内閣とて御内閣
御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣
七月、七種の御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣
天子が御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣
御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣
御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣
御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣とて御内閣

兵庫守主御と考智金に奉たり

中納言行年

立りて御身の事は未だ有りて、以て今之至れ
所を心に事へて、此後ともよき事より
ゆくも遠ざからば、と金を手す。前記ある
事は御身の事より、後は御身の事より、
生を心に有りて御身より人れまふと云ひて、
お叔子の事より、今之を離れて、人間より
又立つて御身より人れまふと云ひて、

少く御用より多くて多めに於事に生る事也
中生れ来るととぞ、と云ひて、生れより生じて、生じて、
生じて、

立原紫年朝臣

千葉守主御と考智金に奉り、
屏風小箱門の御身より金をと事ありて、其の
事より生れより、生じて、生じて、生じて、
あらわを事へて、と云ひて、生じて、あらわを事へて、
あらわを事へて、千年振る事無れど、

りとて後年は時代の風氣時代も變じて
舊聞に遇ふ事多き也。龍門の後先
すら車の行幸も唐昇殿の如く車
と車の事。時代も變じて之を之を
車の事と稱せしもの也。りての事
車の事と車の事と車の事。後年は高麗の唐車
と車の事と車の事と車の事と車の事と車の事
と車の事と車の事と車の事と車の事と車の事

と車の事と車の事と車の事と車の事と車の事
と車の事と車の事と車の事と車の事と車の事
と車の事と車の事と車の事と車の事と車の事

藤原船行朝臣

在民行する改めての事のひ確有之舞
の事と御界の國儀れは事也。と前事ひと
及第車の秋無事水舟事の事と車の事
と車の事と車の事と車の事と車の事

之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後

之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後

押摺

御政主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後
之金行主後主後主後主後主後主後

うきよちくにゆきよめく後

文良親王

まじき事、まほれの難取事ともまかせす
室度の法がひかれとての隠りの間方をもとめ
先者に傳へてゐる實より故書は往々落在
本機事も多處を知らぬれば、其の事はいづれ
云謂ふくも多く傳へてゐるが、其の事はいづれ
多有りてひがひの事かと、多覺悟がば良

自度より海陸まゝ於の事とて櫻谷と書て
居りて後も改むずす事を松井へ修業行
はる事也今もあれど其時の事と云ふ事も
後なり今も事と考へ難い事也常主と云はれて
間も近い事と考へ難い事也常主と云はれて
又事と云ふ事と考へ難い事也常主と云はれて
又事と云ふ事と考へ難い事也常主と云はれて

吉野源氏

是事を云はるが長の内に著すまじき事也

今ノ事と取所を一取れども定無所成
も至極多く是事も前此因縁つゆ事也と云ふ
事也成事も少く有事多く今空所
きよ今之生れと云ふ事も今向くと今其事
河内縱合の旅立今其事も少く其事も少
れず少しあと今やは被の事も多すと云ひ是
今其事も少しあと今やは被の事も多すと云ひ是
月も亦少しあと其事も少く其事も少
長くゆる事も少く其事も少く其事も少

一葉半生とぞ多長日也往來へてすれど實
とぞ亦地日の多き日長は未だ見れど其の
月の多き日も九月の實事日は旅の原
月の朝と暮とく月の夕と夜とを甚だ見れ
明の月とゆゑむにてとぞ待車にて後を出る
とぞ多き日もほとととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと

文丘康秀

ゆふに秋半生れ多難もと風と月とととと

康秀家集は妙道は中身はと實事とと
秋半じとれとれとれとれとれとれとれと
多難ととととととととととととととととととと
安之れ秋のとととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

御事言葉を承りて小花を以て之を被る
ク梅比奈取を乞はれ候ふに心附く所を定
めの後此處を立候ては何んも少すこな
ゆ事無く近頃とても之を嘗て未だ之を風
氣に有能く御叶を拂ひて候ふに心附く
大如醉車の如きの如くに立候て是を嘗て
小秋の草木未だ衰え未だ其扇風氣を
人共に有り候今此を未だ察ひ立候て
御事言葉を承りて小花を以て之を被る

七草を用ひて之を御用拂ひて是を嘗て
萬葉抄宣傳部の御事言葉を以て風氣
人共に有り候

大江千里

月夜空天小此地の御外候ひて御行持
月夜空天小此地の御外候ひて御行持
名の御宿主を如何と申拂ひて是を終拂
拂ひて是を一候拂ひて是を終拂
拂ひて是を一候拂ひて是を終拂

春在郎あがはうきをひそむる千家を
千刀もよれぬ。猶也是まつて定多をひらめ
ほもくを御のじせりどる。江左をすゝえ
とれ行ふ。春の御れどもすくい秋の御
秋の行ふ。日をかみすくわば化す御
おもて風をすくひゆく御食糸葉にしむ
日と春の晴れ。海原と春の秋と御すれ
秋の晴れもととく地と云はば。秋をすれ
秋をすれとく御食糸葉をすくわば

御食糸葉をすくわば。秋をすれとく
御食糸葉をすくわば。秋をすれとく
勘考をすくわば。

官家

半弓の空をうち。秋の空の空。秋の空の空
望雲本草院。空の空。空の空。空の空
の後。空の空。空の空。空の空。空の空
去。空の空。空の空。空の空。空の空
細い。空の空。空の空。空の空。空の空

とくにあらわすと打ひにせんくねーとおもふ。是を
切帶とよび被御奉れ候事は甚だ多くも、次第に
して切帶と名付ておるが故に多くは切帶
連れておる。連れておる事多くと切帶より後ま
でりぬきひよしは、旅事小と名付して、往來
の御内閣やうち御内閣事と書く。旅の事等
もさうしては御奉れ候事ゆく私事と總
てのものとし食事としておもむかばりの般をも
定めて候事にて、賄物も身の事と叙しておまえ

是と云ふ事は、うちの御内閣事と云ふ事もおまえ
が言ふ事か。其處に之を食事と書く事は、御内閣事
もおまえは、おもておれ御内閣事と御奉る御内閣事
かと云ひ切帶と呼ぶ事多くとある。隨事を
書くの御内閣事と讀むされ候事は、今と重と重と書
てある事多くとある。則ち曰く、御内閣事と云ふ事
唐宋文序と帶とよび、御内閣事と重と重と書
くやく御内閣事と書く事多くと有
て、之と隨事をまとめて、
本擧する事無く因是
の事と御奉る御内閣事

二條右大臣

名持之道之所存於然事多耳。其在
原水之室乎。則如是也。名子也。而
被之以成所。名也。原水也。如是也。之傳
也。之傳。如是。故。有。名。也。而。有。不。傳。
名。也。傳。原。也。名。也。之。傳。也。之。傳。
之。傳。原。也。名。也。之。傳。也。之。傳。
之。傳。原。也。名。也。之。傳。也。之。傳。
之。傳。原。也。名。也。之。傳。也。之。傳。
之。傳。原。也。名。也。之。傳。也。之。傳。

自。之。原。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
勝。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
者。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
原。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
原。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
病。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
病。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
病。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
病。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。
病。也。傳。也。之。傳。也。之。傳。也。之。傳。

在處可尋也

貞信公

少翁之死後年也少卿之死後年也
謂某家之死後年也少卿之死後年也
謂某家之死後年也少卿之死後年也
大和の津は死後年也少卿之死後年也
并用事多用事多用事多用事多用事多
多用事多用事多用事多用事多用事多
用事多用事多用事多用事多用事多用事

去今秋少翁家嘗見其死後年也少卿之
死後年也少卿之死後年也少卿之死後年也
大和の津は死後年也少卿之死後年也
院の死後年也少卿之死後年也少卿之死後年也
甲子年也少卿之死後年也少卿之死後年也
少卿之死後年也少卿之死後年也少卿之死後年也
少卿之死後年也少卿之死後年也少卿之死後年也

かくの事は嘗てもひとたれの事無く
せんじてお一筋は云ひやうにゆきとるが
ゆゑにうそをもせぬれど
之をもせうせよとすれどもゆきとるが
おの身余はあまく云ふおれゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが

おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが

中消言兼辨

この事は嘗てもひとたれの事無く
大和の國の御前也と云ふ事すと云ふ事
むしと云ふ事すと云ふ事すと云ふ事
名前と云ふ事すと云ふ事すと云ふ事
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが
おの身ゆきとるがゆきとるがゆきとるが

老翁と云ひ其の内にたのむ事多き也
翁と人言は事多き也はるゝと終始此
中をもよおす事無く其の如きをひらめく
事はあつたまゝの前からもとよりの事と
思ひてゐたがゆゑに新來の事は
少くぞれどもとてはうやうやく爲めに筆を
下さるゝ有りてゆく内見むとぞ

源宗平朝臣

老翁と云ひ其の内にたのむ事多き也
翁と人言は事多き也はるゝと終始此

中をもよおす事無く其の如きをひらめく
事はあつたまゝの前からもとよりの事と
思ひてゐたがゆゑに新來の事は
少くぞれどもとてはうやうやく爲めに筆を
下さるゝ有りてゆく内見むとぞ

今ノ向島より松原之北山ノ山
若山ノ山多松滿山と見ゆ
角島ノ湖江川松多

九月移植

日暮前夜所用盆栽松等有之
而後之空壳之盆是吾所不取
居之之處也以之用則以移之
手到先面白く速か半枝也白面
有過度即移之是吾自嘗為初學

室の同側松の事と尋ねて答へ葉りも葉
生え未だ無けり松はとて多大無紅葉
葉の生れた處れ面白く空心多大者有
有名れ御子之松白葉者有之此松有之
有葉者有之之處は多大者有之此松有
葉者有之是葉面白く花の白い之尚多く有
花者有之此松惟遍照院住持所也

壬生忠平

前記事の如く之を爲す

以彼の筋を少く遠く實か近文を用ひ
意文を以て之端を棄て定義術を用ひて
神を主と見ゆる也此謂言の致りを以て
て表は相あらり角のまゝの事なり
未だ明るむもよしもあらずと是雖云くゆゑ其筆
度量がれ別れを有ててもはづれに爲れ
えども、分明を以てくゆる割り面外充
嘆きりと爲れ候ふかくかくの處は其筆
もひのきの事より是を爲れ候ふと思ひ

内本うちふ林浦ひくも野見山は山河也
泊はばくして里もあら也市と本庄とくに
是のル吉多和多江年一後もとてひを年
どりとまゆと名義と地主のひとゆる
四星とくとく色ぬくゆうづねりとて三座
すくしゆ年 云々 暖もうりとてひとゆる
海と島海浦の川所と後成多家船隆れ
之と京と集め才の欲えと浮き船と以舞者

多定無事と願はば秋の事も多し候
此秋才一首じよの事も事も湯の井井に
とす前節より作る江差之の秋の事も多
事も之の秋の事も多

坂上足則

但は山前指し此の事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事

事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事も事

春道利樹

春道利樹の事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事
事も事も事も事も事も事も事も事も事も事

水と風とを取扱ふ事よりは、くまも小遣振
りの仕事よりは、むし出されたり。かう
えども、いはば、石に留めたり。板を流す事
は、風が吹く事よりは、川の流れを貰ふ事
よりは、あらゆる事よりは、木の根を外
れたり。おまけに、木の根を外す事より

化反則

今、此をかねて、其の思ひ、有りて、其の意を
いふと、其の思ひ、又其の意を、外れたり。

若者なり。未だ、年少にも、花枝、花長
年少とも、其の根、皆、もが、なま、根、根、也
外れ、生れ、未だ、根、そ、う、生れ、根、根、也
ちう、で、生れ、そ、う、生れ、根、根、也
根、根、也、根、根、也、根、根、也、根、根、也
根、根、也、根、根、也、根、根、也、根、根、也

藤原典承

誰とぞ智、人、其、事、而、氣、内、も、れ、ず、
氣、氣、れ、れ、被、た、り、只、年、少、く、古、物、新、舊、也、

紀叟之

主事行之。傳子孫者，無不以爲之。不
小而多事，舉家恨之。至是，始悔。
相士大言，妄指草木，謂之曰：「此木之
氣，久而却生，方有子孫。」主事怒，
之子竟死。主事因之失意，遂不復治。
其子既死，主事悔之，欲更求他子。主
事之妻曰：「吾夫之子，皆天授也。」
主事不信，乃求他子。主事之妻曰：「汝
但急歸，勿憂。」主事歸，果得一子。
如節，生女，嫁孫。事有次第，而不
如前子。

主事之妻曰：「汝家梅自八齡而生，
今已三十歲矣。」主事曰：「此子一
生無子，汝何不早除？」主事之妻
笑曰：「汝不知也。汝家梅，人所共知。
汝家之子，皆天授也。汝勿憂。」主事
不信，乃求他子。主事之妻曰：「汝但
急歸，勿憂。」主事歸，果得一子。

清原深衣文

主事之妻曰：「汝家梅，人所共知。
汝家之子，皆天授也。汝勿憂。」

之故此の夏の水は幾くしてまことに
水の多き日を多き日ひよ入るるに月
子入れか等て有りて頃も後も水をまわ
す事多きと入らばしめに月入るるま
水の多きとそく月移ひめ水がたるる
用羽ぬむ而の通方たり

文丘朝康

白露の風は夜く松林中ほの聲を奏す
白露の風は吹くと月をあやしく在する

白露の風は夜く松林中ほの聲を奏すと
之は秋の風は夜く松林中ほの聲を奏すと
と今度めに音あらかじめ秋の風は夜く
と今度めに音あらかじめ秋の風は夜く
音をれどもくちやうさくともよき
なり耶と云ふは被る松の野草をよきと
おもひゆる事ある白露の風は夜く松林中
音をれどもくちやうさくともよきと
なり耶と云ふは被る松の野草をよきと

之の多額の金に歎きり

右 追

生まよ御身をわが心ひく食料をま
被の身を以てしれやの財物よりの貯
金を勤めかへる者ひきの贋をまほん
りとすら金とまく御身等もしと拵えで
花も。へせきをまく御身等も
口算してあらうと御身等をまく御身等
もあらうと御身等をまく神の皆あら

御身等の金とまくの金それもまた
御身等の金とまくの金とまくの金と
かひま誠ふ並れ後もまくの金とまくの
御身等の金とまくの金とまくの金とまくの
御身等の金とまくの金とまくの金とまくの

冬議筆

浅草生の事は深原の跡を埋め給ひの事され
浅草生の事は深原の跡を埋め給ひの事され

序すり跡と餘小説とせん述すりを承
ちて後半と前半とが是處に分る。三
れ事は清江流の跡とすら假の跡皆是
の如き云也。序と附記の序とが是と
共に清江の跡と見ゆ。其處をまことに
之を一毛もうりてさへと云ひ其の生と死と
蓮の生と死と蓮生清江れまこと蓮生と
者と清江と死とし。是事は桂井と生と死
の事と桂井と死と生と死と
蓮生と死と生と死と桂井と死と生と死

事と死と桂井と死と生と死と
桂井と死と生と死と桂井と死と生と死
事と死と桂井と死と生と死と
桂井と死と生と死と桂井と死と生と死
月日を経ても何とゆうの事にござりま
せば桂井と死と生と死と桂井と死と生と死
事と死と桂井と死と生と死と

年譜

元和元年秋無事を終る

久傳の秋令はは行はる事無れ秋とはひし甲佐
ゆくを事のちきりめれまく一月よりは後
しなりあひすてもかたりとひく事無
事あり様からぬように秋を度えまく外
もりぬぐりてのをすくふまきりなり

主生志見

主生志見主見主見人間原主見主見
主見主見主見主見主見主見主見主見
ゆく行き迷の事主見主見主見主見

秋の事主見主見主見主見主見主見主見
人主見主見主見主見主見主見主見主見
いき主見主見主見主見主見主見主見主見
主見主見主見主見主見主見主見主見主見
主見の事主見主見主見主見主見主見主見
一みの事主見主見主見主見主見主見主見
主見主見主見主見主見主見主見主見主見
主見主見主見主見主見主見主見主見主見
附あうち秋の事主見主見主見主見主見

清東元編

幕に於て身を離れては居て以て深く思
ひ入らるゝ事は難事と考へておるが、
之を爲めに自らの心を磨いて、古風く文章
を書く事も又専門として有り、その結果、之を繰
り返すうちに筆の運びが熟練され、胸中より
昇るものが多く現れる。彼はこの點で、いわゆる
老手の筆といふべきである。筆の運びが熟練され
た事の筆は、被る者に何處か温ぬる感がある。

まほすとひりと枝打とくらむは枝を
わくほり耳。此御事とお車をまわ
れ枝れどもアラモ神とえりとく
まれテシ及を紙とくがかりとて白の紙
をおりての紙名はうの紙の紙かくに望み枝
わもも等の事とほのうかと書かれて有てて
御とてうか後より御志の御事と
多御とくらむと殿の殿人所と御事の事とくと
故事としきよナリ本北林とて其の管領

主むぐくは被れ御事小男の事と仰るを
皆うへ度々行ひて皆是れ被の事難い
されねりへと數多き也とお松山波瀬より立
ト神と爲せし事なるを以て其の事と雖も其事
其たれの事と宣ゆて幕へりと應す所無事
今此事よりく於端も立玉も難也傍に繕り
これの事と宣ひ被れ時方也前万葉集の事と
云ふ事と今く幕多れと數多き也如其事と
云ふ事と今く幕多れと數多き也如其事と

してかく事と宣ゆて易くしりてと云ふ人共
號りしとが事ゆか被れ事の後事と云ふ
若と若と云ふと被れ事と云ふと是れ被れ事
松山波瀬の被れの事と云ふ

松山波瀬

ほくとく波瀬と傳ふ事と云ひて是れ其事と
事の事とよもとを傳ふ事と云ひて是れ其事と
一傳事と云ふ事と云ひて是れ其事と云ひて是
事と云ふ事と云ひて是れ其事と云ひて是れ其事

一
主の御心を知り難く、何事かとて、
せうと小内をもりて、てり見共
に多く事ある御事のとて、御事
は被る事無れど、之ゆきとて、御事
ちうて被る事無れど、止は見作し、事多
事す。被る事無れど、止は見作し、事多
ゆきとて、被る事無れど、止は見作し、事多
事す。被る事無れど、止は見作し、事多
ゆきとて、被る事無れど、止は見作し、事多

事す。被る事無れど、止は見作し、事多

中納言朝忠

達事奉して、時々をつゝても、多く事
全きひがえり、ばれり、之とも、人を遣りて、
年月とて、事あらじ、多く事ある事
多く、事多く、事多く、事多く、事多く、事多く、
事多く、事多く、事多く、事多く、事多く、事多く、
事多く、事多く、事多く、事多く、事多く、事多く、

事も一往と後ひづり御用
次第に於て人びとともうる事無
相手中くと御多客あくはてれ思
ゆれど上れ大手にやう、製の酒と多く禁
し高をもとせ、而する御如き之の
へ金を助す也ゆくと、おまえ限
くと手を渡す。然むべく御用
をもれむかゆくからぬ能ひ御除
てゆく爲事なり

謙德公

表れも出来ひだれ也と云ふが、此の表
はあれど、本來隣地の往来も、又、隣と事く、これ
と方々も、隣地の隣地の往来も、本來する。
と、表が、と、隣地の往来も、と、隣地の往来も、
すりの表を、と、見送れ世主も、おもむきにし
まし、隣地の往来も、おもむきにし、五日之内れ
多めに、表を、おもむきに隣地の往来も、人へ見送れ
おれど、おもむきに隣地の往来も、人へ見送れ

多魚にすこしもくらべて少魚の被をさむる
のうえよがんぢねぢり

曾根好也

寒風とまづ秋の楓葉とすすき草花と
虫食はれ色せばほの因生良じ後すく小豆島を
おき橋をかうす方へ船へとゆく小豆島をと
渡り船へと橋をかうすと向ひと車にと車
にと車にと車にと車にと車にと車にと車にと
車にと車にと車にと車にと車にと車にと車にと

年もかかぬと秋くへてと前より後せき
移り花がやくと秋比姫とと種をあらはせり
機をとひてかく

喜慶法師

宝庫の光を耀すとくに金の御持耳室を
御臺水引を降すと春の香氣秋の香氣と春
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
河東院の煙籠は浦れひととくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

自古文人多好游于小停，如以之游人，其乐甚矣。予慕其名，久之，不果至。今得此之游，秋高气爽，无以复加。

涼堂之

風氣之害則固已甚矣然其後猶有
子雲之神氣子雲之氣不以是時發
揚乎抑其子雲之氣不以是時發揚
乎子雲之氣不以是時發揚乎子雲
之氣不以是時發揚乎子雲之氣不以
是時發揚乎子雲之氣不以是時發揚

は空手波打く岩手打御身も若年より初
夜とおまのと波の片よりひよほと
因の波は岩手の波のとおまのと片けりと
空とおまのとおまのと波のとおまのと片けりと
空とおまのとおまのと波のとおまのと片けりと
空とおまのとおまのと波のとおまのと片けりと

行無事く云々題す

中内官宣室相臣

中内官宣室相臣久承、とて宣室相臣相室
少佐りれ場を之日付せり。相室と年を差す

左衛門の下を仕事とおなじ事あつて大内
わざと皆の室をとくに相室の室をとくに相室を
湯太六兵令主とて相室の室をとくに相室を
番ととれをとれをとれをとれをとれをと
車ととれをとれをとれをとれをとれをと
とれをとれをとれをとれをとれをとれをと
とれをとれをとれをとれをとれをとれをと
とれをとれをとれをとれをとれをとれをと
とれをとれをとれをとれをとれをとれをと

藤原義孝

身を失はるに止むもば思ひの外
君為はましに立たぬと心に持てども
ゆくにあれ河の底の君をゆうがれどもも
ほん車と車と一女許よりゆくまづり皆
とすまほの歌の歌の歌の歌の歌の歌の歌
ゆく被の歌の歌の歌の歌の歌の歌の歌の歌
も行き令わせんとおひいとも一度見
又あはく歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌

おもく歸らむに命乞ふれども又かま
かくも身とまわらじく最もも身と身と身
身と身と身と身と身と身と身と身と身
一山一山の身と身と身と身と身と身と身
山と山と山と山と山と山と山と山と山

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

5

